

操作された視線: 「見る」と「視られる」

—フィリッポ・リッピ作《窓枠の女と男》とシンディー・シャーマン作
《アンタイトルド・フィルム・スティル#2》のケース・スタディー—

“What is Valid/Invalid Context?”

Seeing and Being Seen: Instructed Male Gaze

In the case of Filippo Lippi's *A Woman and a Man at a Casement*
and Cindy Sherman's *Untitled Film Still #2*

小 谷 訓 子

本稿は、15世紀イタリアの画家フィリッポ・リッピ作《窓枠の女と男》(*A Woman and a Man at a Casement*, c. 1435-1445, Metropolitan Museum, New York) と、20世紀アメリカの芸術家シンディー・シャーマン作《アンタイトルド・フィルム・スティル#2》(*Untitled Film Still #2*, 1977) という時代と地域の全くかけ離れた二作品を取り上げて比較し、その過程で美術史の方法論について論じることを目的とする。

先ずは、リッピ作品をアーウィン・パノフスキー (Erwin Panofsky) の理論に従ってイコノロジー的に解釈し、この方法論の陥りがちな目的論的傾向を指摘することから始める。特に画中の女性像が身に付けている真珠に着目し、キリスト教における真珠の意味と新プラトン主義的な真珠の意味などを考察する。つまりここでは、真珠の図像学的意味が複数あることを明示し、イコノロジー的解釈とは、意味の取り方次第で作品解釈の結論を恣意的に決定できる方法論なのだと

いうことを確認する。この問題を浮き彫りにするために、シャーマン作品も時代錯誤ではあるがイコノロジー的に分析する。

議論の次なる段階においては、その焦点をシャーマン作品に移行する。主としてグリセルダ・ポロック (Griselda Pollock) やロザリンド・クラウス (Rosalind Krauss) の理論を用いながら、本章においては、二作品をフェミニズムの観点から分析する。その際、両作品の制作当時における女性観や、主体と客体のダイナミズムを踏まえた上で、それぞれの絵画空間における女性性 (femininity) を確認し、フェミニズムの概念を駆使して作品に取り組むシャーマンと、そうではないリッピとを比較しながら考察を進める。

論文全体としては、解釈や解説という名の下に、芸術作品に付随するコンテキスト (文脈) としてのテキスト (言葉) の存在の意義を唱えるものである。